

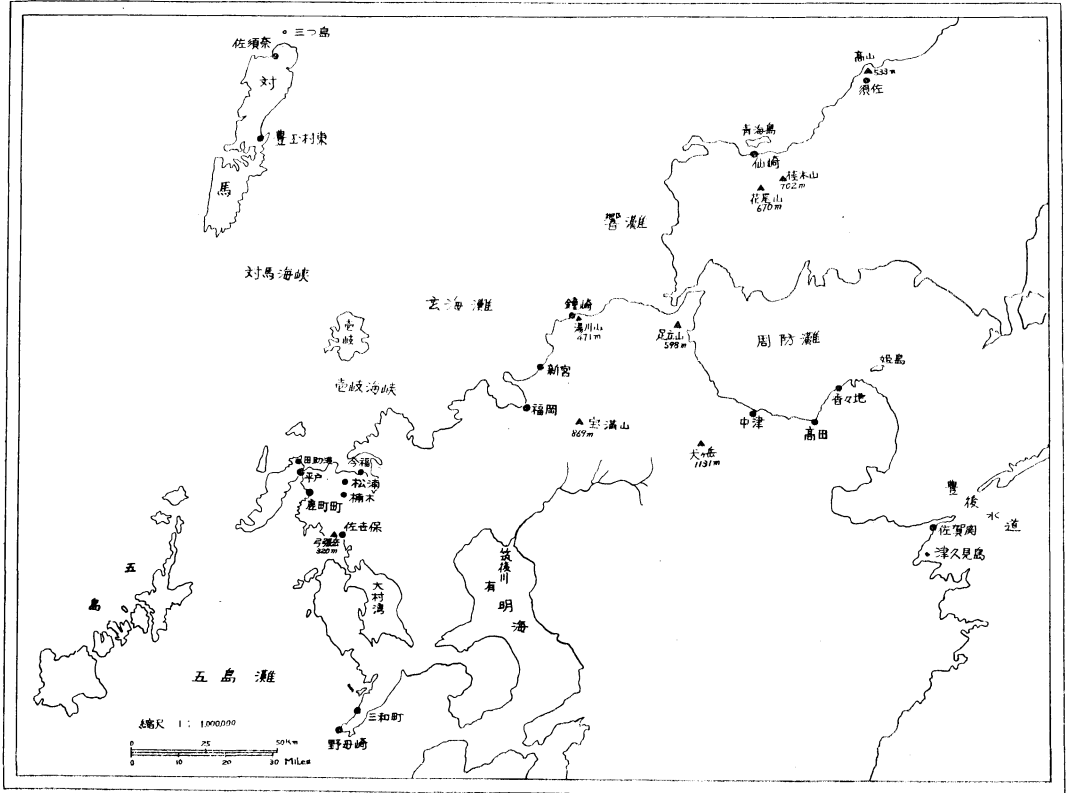
北九州における海難防止に関する天気俚言* (その一)

菊池繁雄** 尾崎康一*** 山口 亨**** 宮園実康*****

はしがき

天気俚言は、元来その地方地方の人々の、あるいは、特定個人の印象に強く残ったものが言い伝えられたものが多く、したがって、当然のことながら、夫々の土地についての局地性が盛られている。ところが、その表現の仕方には、対象とする現象が、何時、何所で、どんな具合に見られたものか、時間的空間的の表現があいまいな

ものが多い。しかも、大抵のものは、近くに正確な気象資料が得られない。したがって、それらの一つ一つの俚言に、正しい気象学的解釈を与えることは、至難のわざであって、現地における再調査や、俚言に基づいた特別の観測調査を行なわねば、正鵠を期することができないものである。それゆえに、ここでは、一般的、定性的な解釈によらざるを得なかったが、地図による地形、その



第1図 地点分布および地勢図

* On the Weather Proverbs to Prevent the Sea-damages at North Kyūshū District.

** Shigeo Kikuchi, 長崎海洋気象台

*** Kōichi Ozaki, //

**** Tōru Yamaguchi, 神戸海洋気象台

***** Saneyasu Miyazono, 長崎海洋気象台

—1963年 8月26日受理—

他をできるだけ参照して、別記のような解説を試みた。

なお、アンケート3、4については、現地調査を行なわない限り、紙上で解釈を下だし得ないものであるからここでは省略した。また第7章の(13)の生物に関する俚言は、気象という環境変化に対する生物の生態変化を表わしたもので、ここでは判らないから、単にアンケー

ト回答の一覧表に止めた。

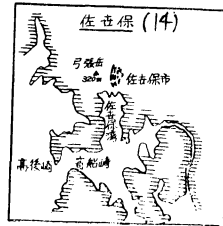
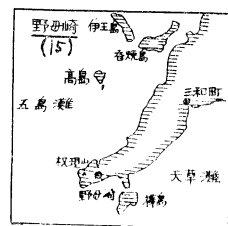
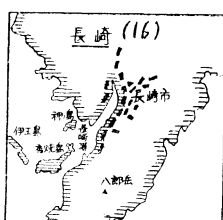
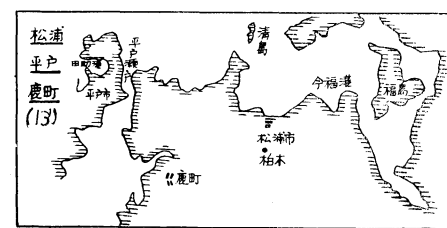
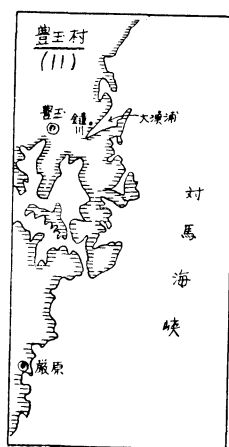
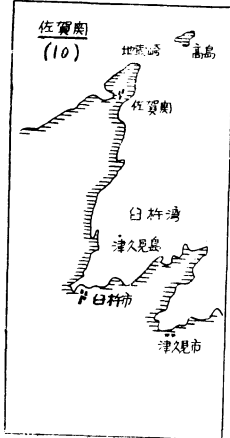
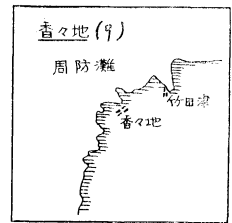
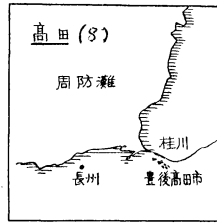
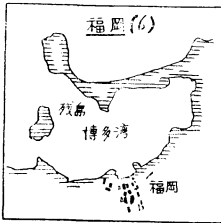
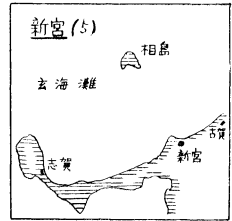
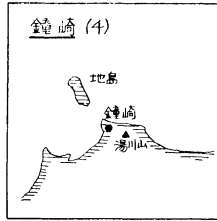
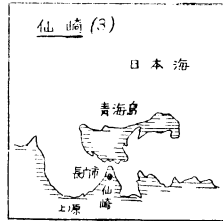
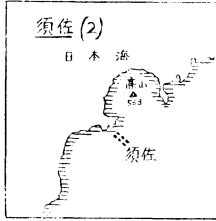
このアンケートの収集は、第七管区海上保安本部で行ない、長崎海洋気象台においてそれらを分類整理して、解説を付したものである。山田長崎海洋気象台長の指導のもとに、アンケート1、2の個々の解説は主として山口が、アンケート5、6のそれは尾崎が、アンケート7及び全般的解説並びに整理、編集は菊池及び宮園が執筆した。

(1) アンケートの内容

問1 気温が急に昇ったとき、または急に下がったとき、翌日の天気はどう変わるか。あるいは、どの方向から、どんな風が吹くか。または無風状態となるか。

問2 四季のうち、突風が起こるときの前兆に、どんな徴候があるか。

問3 台風のととき、この港はどの方向からの風が危険であるか。また避難港は何所か。



第2—16図 各調査地点付近の地形図。

図中の番号は本文中の図の番号を示している。

問 4 強風のため、海難は何所に多いか。

問 5 どこかの山に雲がかかれば、雨または晴、あるいは、どの方向の風が吹くか。

問 6 夕焼け、朝焼けは天気はどう変わるか。

問 7 その他、天候や風などを予察するに足る俚言。

(2) アンケートに協力した漁業協同組合名簿(省略)

(3) 地点分布と地形

アンケートの 1

気温が上がったとき、又は急に下がったとき、翌日の天気はどう変わるか。あるいは、どの方向からどんな風が吹くか。又は無風状態となるか。

〔一般的な解説〕

気温の急変は、普通低気圧や、移動性高気圧の通過によって生ずる。それが体感としては、暖候期には気温の降下を、寒候期には上昇を感じ易い。ところが、夏の低気圧は、日本の遥か北方の、満洲方面を通るものが多いので、そのための気温変動の影響は、あまり起こらないのが普通である。

さて、冬期に起こる気温変動は、大陸高気圧が南東に張り出して、日本の上空にまで延びて、その気圧の勾配がゆるむと、一時寒さが和らいで小春日和となり、その日は気温が上がり、とくに暖さを感じるようになる。そうして、それが過ぎた後の天気は下り坂に向かい、一日ぐら以後には、低気圧が九州の西方に現われる。それが日本海に進んでから、発達するような場合には、この低気圧に伴う寒冷前線の前面で、南西の突風が起こり易い。それが通過した後からは、再び大陸高気圧からの北西寄りの季節風が吹きだし、北九州では曇り勝ちとなり、俄雨や俄雪が降って、ぐっと寒くなる。そうして、しばしば、この寒気の中に北西の突風が伴われる。

春秋の頃になると、大陸から移動性高気圧がやってきて、日本を通過し、その後には、低気圧がつづいて、天気は周期的に変化し、いわゆる、春の三寒四温と云われる気温の変動が起こる。

上に述べた気温の変動は、日を単位とした、どちらかといえばやや長い変動であるが、低気圧の通過に際しては、もっと短時間に気温が急変する。とくに、春秋の頃のものには、気温急変が著しく体感される。低気圧が東海から日本海へ進むと、始めに、温暖前線が通って小雨が降り、西日本は、いわゆる低気圧の暖域の中に入って南西風が吹き、気温が上がる。その後間もなく、寒冷前線の通過による俄雨があり、風は北西に急変し、気温

が急降下して、うすら寒さを感じる。

〔回答〕

(1) 気温が昇った時は、南西風で雨、下がった時は北風で何ずれも強い。(須佐)

冒頭解説のとおりである。

(2) 夏はあまり影響はないが、冬は中一日を経て、東または南の強い風が吹く。(仙崎)

これは、冒頭解説に述べたとおり、大陸高気圧が南東に張り出し、九州が小春日和になり、その後で、低気圧の通過により南寄りの強風が吹くことを指すものであろう。東の強風が吹くようだが、仙崎の地形のためかと思われる。

(3) 気温が急変したときは、必ず雨か風が吹く。(鐘崎)

これは前線の通過を意味する。温暖前線の場合は、朝鮮海峡を通過する低気圧によって南西の風と雨が、寒冷前線の通過後は、高気圧の張り出しや、日本海で発達する低気圧による北寄りの強風と、俄雨のあることを言ったものであろう。

(4) 5～8月はとくに変化はないが、9～11月では、気温が下がった方がよいようだ。(新宮)

5～8月については冒頭解説のとおりである。9～11月は、一般に、天気は周期的に変化する期間であり、寒冷前線が通ったあと、即ち、気温が下がったら、それによる悪天気が過ぎ去り、次の移動性高気圧の圏内に入るため、天気がよくなることを指すのであろう。

(5) 気温が急に上下した時は、北東の強風が多い。(中津)

記述が不十分だから詳しくは判らないが、当地は、周防灘を渡る北東風を、正面に受ける位置にあるので、とくに、この風が強く感ずるものと思われる。

(6) 気温が急に上下した時は、翌日は風か、雨となる。(豊後高田)

(3)の場合と同じである。

(7) 冬、急に気温が上がった時は、南風が強く、急に下がった時は、北西の風が強くなる。(佐賀関)

(3)の場合と同じである。

(8) 気温が上がった時は雨、下がった時は北風の時化となる。(佐須奈)

冒頭解説のとおりで、対馬では予想外に強い北風が吹くことがしばしばある。

(9) 北～北東風、又は南～南西風がとくに強い。(豊玉村)

冒頭解説のとおりである。この地では、湾が北東に開

口している地形のため、北～北東風がとくに強くなる
ことが、厳原測候所から報告されている。

00 概ね無風、但し状況により南西の風強し。(松浦)

無風状態とは、前線通過時の短時間の静穏を意味する
ものと思われる。状況により南西風強しとは、温暖前線
や低気圧が通過したとき、暖域内で南西風が強まり、も
し暖候期ならば、雷を伴った豪雨になることが多い。

01 気温が昇った時は南東風が、下がった時は、雨又は
北西風が強くなる。(鹿町町)

冒頭解説のとおりである。低気圧の暖域内での南東風
は、この地では、県境の山系による弱いフェン現象のため
に、雨が少なくなるようである。

02 気温が昇った時は、翌日は南東風で、又は雨になる
ことが多い。下がった時は、曇天で微風が多い。(佐
世保)

ここでいうところの、気温が上がった場合は、移動性
高気圧の後面に入ったことを意味するものと思われる。
したがって、風は南東が吹き、翌日は低気圧の接近で、
曇から雨になるためであろう。

また、下がった場合は、寒冷前線の通過によるものと
は考えられない。もし冬ならば、北西の季節風のため
の、曇天を指すものであろう。風が弱いのは、佐世保の
北西に弓張岳があるためと思われる。何ずれにしても、
この項は、表現が明瞭でない。

03 気温が急に上がった時は、南風で雨。下がった時
は、北又は北西風が吹く。(三和町)

冒頭解説のとおりである。当地は、北又は北西風をま
ともに受ける地形にあるから、この風が、とくに強くな
るものと思われる。

アンケートの 2

四季のうちで、突風が起こるときの前兆に、どんな徴
候があるか。

〔回答と解説〕

(1) 夜間電光が一線になるとき、昼間ならば、空に火の
子を見たときは、突風がくる。(須佐)

突風には、普通積乱雲を伴っているので、電光や雷
鳴がある。この電光が線状に見えるのは、活発な積乱雲
が、ごく近いことを示すものであるから、当然突風は間
近いことになる。

“火の子”とは、気象学で幻日という現象である。こ
れは、年に一回あるか、なしという位にまれな現象であ
るが、大気中の水蒸気や氷晶が、非常に多く浮遊してい

る時に出るものである。だから、その後に、突風のような
なげしい気象変化がやってくる可能性が大きい。

(2) 霜が早くとけ、朝焼けがする。又は深い露が降り、
黒い朝焼けがする。(仙崎)

霜が早くとけ、深い露がおおりるのは、移動性高気圧に
おおわれた時である。冬ならば、小春日和の好天気で、
気温の上昇が早いから霜は早くとける。こんな時に、黒
い朝焼けがすることは、その後に、活発な低気圧や前線
が接近していることを意味し、したがって、突風のくる
可能性が大きい。

(3) 8月以降の大風を除き、北東風が強まり、夕立とも
なれば、風雨が強く吹きつける。(中津)

8月以降の大風のうちで、台風と季節風は別にして、
強い北東風が吹くのは、低気圧の接近の場合である。移
動性高気圧が東へ去り、九州西方に低気圧が接近する
と、東寄りの風が吹き、俄雨が降ることが多い。中津
は、北東が周防灘に開いているから、北東風が強くと
易い。この項は、これらの現象を言ったもののように、
突風の前兆を述べていないようである。

(4) 突風が起こるときは、前日絶好の晴天である。(豊
後高田)

絶好の晴天というのは、移動性高気圧におおわれた小
春日和を言う。この後には、概ね、強い低気圧などがつ
づいて、突風が来やすい。

(5) 2～3月ごろ、海から陸にかけて“かすみ”がかか
り、丸い小さい雲が出れば、突風の前兆である。(佐
賀関)

(4)の場合と同じである。

(6) 10月より翌年3月上旬ごろまでに、夜、西の方(朝
鮮の方)が光れば、西の突風が来る。(佐須奈)

(1)と同じで、冬の“西落し”の突風を述べたものであ
る。この突風は、普通積乱雲を伴っているので、電光
や雷鳴がある。だから、夜間出漁中、西方に光が見えれ
ば、間もなく突風が来ると考えてよい。(7)

(7) 潮が急にふくれ、ウネリが立ち、水温が上がる。
(平戸)

海面が急にふくれるのは、アビキ(港内の副振動)と
思われる。ウネリは、西方にある寒冷前線や、低気圧に
先行する波であろう。水温の上昇は、1、2日前に通
った移動性高気圧による好天のため、表面水温がいく分高
まることを言っているのではなからうか。外洋の比較的
暖かい海水が、移動してきたとは考えられない。

(8) 松浦は突風が割合に少ない。起こるときは、南西又

は南風が吹く。前兆ははっきりしないが、気温の上昇がある。気温低下のおりにも皆無とは言えない。(松浦)

当地は、湾口が北東に開いている地形のため、突風が吹きにくいのであろう。いわゆる“西落し”の突風は、南西風が強く、気温も高い。気温低下の時にも、時々ま起こるようであるが、それは、冬の季節風に伴う北西～北風の突風であらう。

(9) 気温が急変して、一時無風状態となることがある。(鹿町町)

アンケート1(10)を参照。

(10) 朝の雲行きが非常に早く、半時間ぐらい無風状態となり、気温がやや上昇気味となる。(佐世保)

前項(9)に同じである。雲行きが速いのは、800～1000米までの下層大気中に、南西風の暖かい湿った空気が、どんだん吹き込んでいるためである。この層より上空に、大陸から北又は北西風の冷たい、乾燥した空気が流れこんでくると、突風が起こり易くなる。

(11) 冬、南西風のあと、雨がばらつくと、すぐ北西の突風となる。(三和町)

これは、突風の前兆というよりも、突風時における天気変化を表現したものである。

(12) 北東風が吹いて(地風と言う)、雨気のする時は、西上(突風)の前ぶれ。(野母崎)

温暖前線の北側では、普通東寄りの風が吹き地雨が降る。ここでは西彼半島のために、北東風が吹き易い。そうして、その後、やがて寒冷前線に伴う突風がやってくることが多い。

(13) 西の空が、墨を引いようになれば、突風が吹く。(野母崎)

西の空が、真黒い雲におおわれるのは、寒冷前線に生じた積乱雲である。だから、突風がすぐ近くにまで来ていることを表わしている。

(14) 冬、無風状態で、西から雲が昇ると、西上り(突風)がくる。(野母崎)

(10)の場合に同じで、突風を伴った積乱雲が、接近することを表わしたものである。地球は球であるから、始め水平線上に雲の頂が見え、近づくとつれて、段々下方まで見え出すことを、雲が昇ると表現したのであろう。

アンケートの3

台風の時、この港はどの方向からの風が危険であるか。また避難港は何所か。

本章の回答に対する解説は、夫々の現地を調べないと判らないので、ここでは省略する。

〔回答〕

- (1) 須佐: 北西風。
- (2) 仙崎: 南東風。漁港内、又は青海島、大泊湾に移動する。
- (3) 鐘崎: 西及び南風。風の方向に舟を立て、嚴重に繫留する。
- (4) 新宮: 北々東風。船を海岸に引き上げ、棒杭に止める。
- (5) 中津: 北東風。港の奥に避難する。
- (6) 豊後高田: 北東風。適当な港がないので、陸に引き上げる。
- (7) 佐賀関: 東～南東風。下浦港より上浦港に避難する。
- (8) 佐須奈: 西風。風に向かって舟を立て、錨を打てば心配はない。
- (9) 豊玉村: 北東又は北風。湾内の戸野浦、峰村榭港、横浦港に避難する。
- (10) 平戸: 北西風又は東風。田助港では、平戸港に廻港する。
- (11) 松浦: 北西と南西風。今福港北東に避難する。
- (12) 鹿町町: 南東又は北東風。
- (13) 佐世保: 南又は南東風。西風も強い。佐世保川川口が主で、外俵々浦、野崎、庵浦、鹿子前、下船越の各地点は、夫々の港内に避難する。
- (14) 三和町: 南及び南東風。港の奥に避難する。
- (15) 野母崎: 南乃至南西風。

アンケートの4

強風のため、海難は何所に多いか。

海難の発生は人為的なもの、異状気象などの不可抗力的なもの、あるいは両者の混合によって起こっている。いわゆる、海の難所といわれるものには、局地的地形のために、常に流れや風の異常があって、これに上記の原因が加算して生ずるものが多い。したがって、海難の原因調査は、一つ一つの海難について、これらのすべてに亘っての詳細な調査なくしては、明らかになし得ない。それゆえ、ここでは、解説は省略して、回答のみを一覧することに止めた。

〔回答〕

- (1) 須佐: 港外4～6哩付近。
- (2) 仙崎: 川尻崎、角島付近。

- (3) 鐘崎：港内，鐘崎の北方付近。
- (4) 新宮：無理をして，入港寸前の事故が多い。
- (5) 中津：上深部と底部の境付近。
- (6) 豊後高田：場所不明。
- (7) 佐賀関：牛島と関崎の間付近。
- (8) 佐須奈：棹崎付近。
- (9) 豊玉村：長崎鼻，銭島付近。
- (10) 平戸：志々岐灘，平戸瀬戸，波戸岬。
- (11) 松浦：星鹿，志佐，調川の海岸線。
- (12) 鹿町町：位置不明。
- (13) 佐世保：東浜港及び野崎海岸付近，港外は舵掛瀬，九十九島付近。
- (14) 三和町：大瀬鼻南方4～6 km 付近。

アンケートの 5

どこの山に雲がかかれば，雨又は晴，あるいは，どの方向の風が吹くか。

〔一般的解説〕山にかかる雲で，天気を予測するためには，山にどのようにして雲ができるかを，知っておく必要がある。

山に向かって風が吹くと，山の斜面に沿って空気がはい上がる。この空気は，上昇するにつれて，含まれている水蒸気が凝結して雲を生ずる。これに対して，空気が山を下だる場合には，雲は消散する。したがって，風下から見れば，山頂にのみ雲が残る状態が多い。

なお，山に雲が生ずるためには，はい上がる空気が十分湿っていること，上昇速度，風向きなどにも関係する。その結果，それぞれの土地に特有な俚言が，生まれてくる訳である。

笠雲が，山頂にかかることがあるが，これは，上空で風が強く，空気が湿っていることを示すものである。このような上空の強風が，やがて地上に降りてくることがあるので，風や雨の兆となる。

次に，このアンケートに対する各地の回答と解説を掲げたが，さきに述べたとおり，山雲の発生という現象は，それぞれの土地特有の地形と，その地形のために，特有の風が吹く関係上，現地における風や地形の観測調査を行なわない限り，正しい解釈を下し得ないものである。したがって，ここでは，上記した一般的な考え方に，地図をもとにした地形の影響を加味した解説を試みたのみで，もとより，十分な正確さを期待し得ないものである。

〔回答と解説〕

- (1) 高山に雲がかかれば北の風。沖合から見て，陸上の高い山に雲がかかったときは雨，又は南風が強まる。
(須佐)

高山は，須佐の北にある500米ほどの山である(第2図)。したがって，北風がこの山をはい上がれば，ある程度の雲を生ずると思われるが，南風では，須佐の南方に山脈があるので，これらの山脈に雲がかかる。もし，それが，低気圧による南風であれば，雨は近い。

- (2) 青海島，山島山に雲がかかれば，北の風で雨。(仙崎)

青海島は，仙崎港のすぐ北方に横たわる比較的平坦な島である(第3図)。高い山がないから，雲がかかるというよりも，島の上空に雲が見える状態ではなからうか。だから，その雲から雨が降るのは，北風によって飛んできた雲であり，そのような状態は，冬の季節風の時に多いと思われる。

- (3) 花尾山，桂木山に雲がかかれば，南の風で雨。(仙崎)

第1図で示されるように，この山々は，仙崎の南方にあって，600～700米の高さがあるから，これらにかかった雲というのは，気流が山をはい上がるときに，生じたものであろう。そのような状態は，南の方に非常に湿った空気があり，また，風も強いと考えられる。しかし，これらの山々は，フェーンを起こす程高くないから，風下に当る仙崎では，雨が降るのであろう。このような状態は，日本海に低気圧がある場合に多い。

- (4) 北，北西，北東の風で，荻市の空がさえたときは晴。
(仙崎)

荻市は仙崎の東北東にある。北東風のとき，荻市方面が晴れていれば，この方面からくる雲はなく，当地は晴れになるが，北や北西風と荻市の天気とが組み合わされていることからみて，この北寄りの風は，南寄りから北寄りに，風向が変わったときを考えたい。そうすると，この北寄りの風は，低気圧などが通過したことを意味するから，天気は好転しよう。

- (5) 陽川山が雲をかぶれば，西の強風でも，翌日は北風になる。(鐘崎)

陽川山は，鐘崎の南東にあって，高さは471米である(第4図)。この山に雲がかかるほど，空気が湿っていて，強い西風が吹いていれば，それは低気圧の影響と考えたい。低気圧が，当地の北方を通過すると，西風のと北風となるが，それは，必ずしも翌日と限られることではない。

- (6) 宝満山に、後より雲が立ち昇るときは、東風強く、その前受では西風。(福岡)

宝満山は、福岡の東南東方にある800米程の山である(第1図)。この山の背後で雲が昇るということは、東風が、山の東斜面をはい上がるときに生ずる雲を指すと思われるが、普通東風は、低気圧の前面で吹く風であるから、この低気圧に伴う雲かも知れない。何ずれにしても、天気はよくない。この低気圧の通過後は西風となつて、天気は回復する。

- (7) 南、南東に雲があるとき、又は北東の海上に雲があるときは風浪。(新宮)

新宮の南東方に宝満山がある(第5図)。この山に雲がかかることは、(6)と同じ理由で、低気圧の接近を意味し、東寄りの風が吹く。この風が吹けば、朝鮮海峡では、海峡風が強くなるので、新宮沖の玄海灘はシケとなり、風浪が立つと思われる。

- (8) 豊後山脈に雲がかかれば、北西の風が強くなる。犬嶽に雲がかかれば、雨多し。小倉足立山方面に雲がかかれば、北東風が強くなる。(中津)

中津の南西から南東にかけては、1000米をこえる犬嶽などを含んだ豊後山脈がある(第1図)。この山脈に雲がかかるには、北東又は北西風の場合と、南西風による場合とが考えられる。

“北西の風が強くなる”という俚言は、冬の季節風が強い場合に、山脈の北側斜面を、かけ上がってできる雲のことを言ったものであろう。“犬嶽に雲がかかれば雨が多い”というのは、風向がないのでよく判らないが、低気圧の前面で吹く東寄りの風のときに、できる雲のことを言ったものではないだろうか。小倉足立山は、小倉市のすぐ東方にある600米ほどの山で(第1図)、中津からは、周防灘をこえて遥かに見えるのであろう。この山は低いし、またかなり遠方なので、低気圧の前面などで吹く東寄りの風のときしか、雲がかかるのが見えないのであろう。

- (9) 南西の山に、雲がかかれば、雨となる。(豊後高田) 前項(8)の中津に同じである。

- (10) 津久見島の上に雲がかかれば、大概雨である。(佐賀関)

津久見島は、当地の南方臼杵湾の中に横たわっている島である(第10図)。あまり高い山が無いから、この島に雲がかかるということは、佐賀関から見て、南の方に雲が見えることであらう。したがって、南の方から雨雲が近づくと考えたい。しかし、この俚言のとおりで

あるならば、島の影響で、雲ができるほど、空気が非常に湿っていることを示すこともあろう。

- (11) 島寄り(視界がよくなること)がすると、雨である。(佐賀関)

“雨が降る前は、視界が良い”とよく言われる。これは、空気中の水蒸気が、地面付近によまないで、上空に昇るからである。このような状態は、低気圧や前線が近づいたときに生ずる。これに反して、空気が安定な状態(良い天気である)にあると、地面付近に水蒸気や塵などがたまって、見透しが悪くなる。

- (12) 春先、かすみがかかれば雨である。(佐賀関)

春先、どんよりとかすみがかかるような天気は、移動性高気圧の後面で起こる。このあとには、低気圧や前線が、つづくことが普通であるから、雨となることが多い。

- (13) 朝鮮に雲がかかれば、雨又は西風になる。対馬北端三ツ島方面で、稲光が起これば、北風強く雨となる。(佐須奈)

朝鮮に雲がかかれば、雨又は西風というのは、寒冷前線に伴った雲や雨域が、朝鮮方面から南下してくることを表わしている。この前線が通過した後は、西乃至北の風になる。また、稲光はこの前線に伴った積乱雲によるものと考えられるので、風も雨も強くなる。

- (14) 志佐、柏木方面の山に雲が生じたときは、絶對的に雨。風は南西又は南風が吹くが、南西風は絶對的に見てよい。(松浦)

志佐、柏木は松浦の南にあるから(第13図)、この方面の山に雲がかかることは、南風の吹きつけによって生じた雲か、南方から飛んできた雲である。何ずれにしても、低気圧か前線が、当地の北側、即ち、朝鮮海峡か日本海を通る場合に、しばしば起こることで、湿った南風がよく吹き、よく雨が降る。

- (15) 弓張岳に雲がかかれば、割合に雨が多く、南風がよく吹く。(佐世保)

弓張岳は佐世保の西にある300米程の低い山である(第14図)。この山に雲がかかることは、(14)と同じ理由によって南風が吹き、雨となる。

- (16) 権現山が真黒になれば、はげしい“さだち”(にわか雨)がくる。(野母崎)

権現山は野母崎の西にある200米程の低い山である(第15図)。この山が真黒になることは、西方にはげしい夕立があることを示しているから、その夕立は、間もなく当地に移ってくると思われる。(未完)